

〔 特 集 〕

起立性調節障害(OD)を 知ろう

最近、「起立性調節障害」という診断名が周囲や報道から聞かれるようになりました。私の職場にも「起立性調節障害」の子どもがたくさん通院しています。患者さんのなかには「学校に行けなくなったら、学校の先生から『キリツセイ違う？ 病院に行ってみたら？』と言われました」とおっしゃる方も少なくありません。教育現場に知られるようになったのは喜ぶべきことと思いますが、「キリツセイ」という略語は、だれが言い出したのでしょうか。「起立性調節障害」は、立ち上がると（起立）、循環調節がうまくいかず（調節障害）、種々の症状をきたす、という症候が名称になっています。心と身体のださまざまな不定愁訴を伴い、経過が長引くために、「一度かかったら一生治らない」「普通の就職はできないので障害者手帳をとるしかない」といった嘆きや、「鼻血が出やすくなったのはキリツセイのせいですか」「乱視はキリツセイの症状ですか」といったビックリするご質問もあります。

一方でベテランの小児科医は「以前の起立性低血圧は思春期の子どもで何もしなくてもよくなったのに、最近の起立性調節障害と以前の起立性低血圧とは違うものですか」と不思議に思っておられる方も少なくないと思います。

そこで今回、小・中学生を中心として、子どもにかかわる方々に知っていただきたい起立性調節障害の発症と重症化のメカニズム、患者自身と保護者が心がける対応、学校や患者会による支援、成人期への移行等について、第一線の方々にご執筆をお願いしました。時間をかけて起立性調節障害の専門医を探すよりも、子ども、家族、学校ほかの方々が協力してできることがたくさんあることを知っていただきたいと願っています。

（関西医科大学総合医療センター小児科／石崎優子）

